



講堂・三面僧坊跡地区

講堂^{こうどう}と僧坊^{そうぼう}の跡です。講堂は僧侶が仏教の教義などを学ぶための建物で、中央の講堂の礎石^{そせき}（柱を支える石）がよく残っています。僧坊は僧侶の住まいで、講堂の東・北・西の三方をコ字状に囲うように建っていたため、三面僧坊と呼ばれています。



礎石が露出した状況（東から）



講堂・三面僧坊跡地区（令和3年12月16日現在）

長い間に、講堂跡と僧坊跡の間を流れる川による浸食が進み、基壇の土が削られ、礎石全体が露出している箇所もあります。そこで、これ以上の遺構の破損を防ぐために護岸の工事をおこないます。また、大正時代に地区の中央につくられた南北通路を低くすることで、講堂・三面僧坊の広がりをわかりやすくします。

さらに、今後予定している発掘調査の成果に基づいて、遺構を表示するなどの整備を令和10年度（2028）の完成を目指して進めます。



講堂・三面僧坊地区の整備完成予定図